

2022年度イラン短期プログラム研修報告書

-日常の中にある祈りと個人主義-

中央大学総合政策学部2年

田中千尋

1. はじめに

「私はちょっと祈ってくるね」と言ったのは、日本人学生に付き添ってモールを訪れたあるイラン人女性だった。笹川平和財団の派遣を通して行われたイラン滞在も半ば、テヘランにあるイランモールを自由に散策中の時であった。それは私が、イランのムスリムにとって「祈り」が生活の中にあるということを理解した初めての経験だった。

日本人はよく初詣や七五三に神社に行き、手の平を合わせて祈る。受験前に有名な神社で合格を祈ったり、盆の時期には寺で先祖の安寧を祈る人もいる。アメリカ人なら、毎週日曜日に教会に行く人はほとんどいなくても、大統領や議員がその就任式で聖書に手を置いて So help me God と神に宣誓するシーンを見たことのある人は多いだろう。しかしこれらの例は、祈りが“日常の延長線上”にはあっても、それらが“生活の中”にあるとは言い難い。

イスラームが生活（俗）と切り離し、宗教としての側面のみでとらえきることの難しさは、昨今「イスラーム“教”」という語の代わりに「イスラーム」と表記する例にも示されている¹。そもそも、「宗教」という言葉は明治以降に日本に流入した religion の訳語であるが、当時の“religion”という語は、キリスト教に代表される「政教分離」が前提であるため、元々の教えの構造が聖俗二元的ではなく、また近代的な意味の政教分離を行わないイスラームに、それらを前提とした religion の訳語である「宗教」を用いてそこから理解しようとすることは困難である。

本報告書では、私が体験したイランでの「祈り」について描写し、「個人主義」「自律性」の二つのワードを用いてイランの人びとにとっての「祈り」の説明を試みた。

2-1. 生活の中にある「祈り」

エスファハーン大学の寮に宿泊した次の日の朝、窓の外から聞こえる甲高い叫び声に起こされた。スマホの時計は5時を示しており、まだ窓の外は真っ暗だった。途切れる様子のない叫び声を聞きながら、唐突にそれが何であるかを理解した。当然のことながらアザーンという言葉は知っていた。代々木上原にある東京ジャーミイのレストランで、夕方のアザーンを聞いたこともあった。けれども、エスファハーンでアザーンを聞いたとき最初に思ったのは「本当にアザーンってあるんだ」ということだった。それからカーシャーンに移動するまでの計3日間、毎日アザーンに朝の5時に起こされる日が続いた。礼拝の時間を呼びかけるアザーンは、一日に5回、日本語ではミナレットという名称で知られる尖塔から行わ

¹ 小杉泰は、「教えそのものをイスラームと名づけている」点と、「イスラームが狭義の……宗教の範疇を超えて、社会のあらゆる面について守るべき規定を定めている」という2点から、「イスラーム教」ではなく「イスラーム」の語句を使用する理由を説明している。小杉泰（1994）『イスラームとは何か その宗教・社会・文化』講談社現代新書（p.10）

れる。

一日五回の礼拝は必ずモスクの中だけで行われる訳ではない。英語で Pray room と訳されるペルシア語のナマズ・ハーネは、祈るための場所という意味である。イランで最初にナマズ・ハーネを見かけたのは空港の中でのことであった。しかしナマズ・ハーネは空港や大学などの格式張った場所のみ設置されている訳ではない。道路の脇にポツンと建っていることや、ショッピングモールの綺麗なトイレの横にあることもあった。トイレのあるところには近くにナマズ・ハーネが設置されていることが多く、そのためトイレと間違えてナマズ・ハーネに足を踏み入れそうになったことが何度もあった。

イラン滞在中、あるイラン人に「毎朝ちゃんとアザーンで起きるの？」と聞くと、「もちろん」という答えが返ってきた。アザーンの音で目が覚めるのかという趣旨の質問であったが、そのイラン人は「毎朝礼拝をするのか」という意味に受け取ったようだった。彼は「礼拝はムスリムにとって空気のようなもの。するのが当たり前なんだ」と言った。ナマズ・ハーネで祈ることもあれば、部屋で礼拝用マットを敷いて祈ることもあるという。彼が特別、信仰心篤いムスリムであった可能性も高い。しかし、礼拝という行為が非常に「身近」という程度を超えて生活の一部であることは、町中に設けられているナマズ・ハーネの多さや、「はじめに」で述べたように「私はちょっと祈ってくるね」という言葉に現れている。

2-2. 祈りの自律性と個人主義

次に、イランの人びとの「祈り」について、「自律性」「個人主義」の二つのワードを用いて説明を試みたい。

イランに到着して二日目、日本人学生らはテヘランにある Imamzadeh Saleh というイマームザーデを訪れた。イマームザーデとは、イランのシーア派信仰の核心部分であり、通常、イマームやその子孫にちなんだ聖なる場所、あるいは聖者廟のことを指す²。Imamzadeh Saleh の建物の内部に設けられたイマームザーデの“核”となる棺は、装飾の施された金属製の柵で囲われており、覗き込むと大量の紙幣らしきものが床を埋めているのが見えた。

注目すべき点は、イマームザーデの建物内外に坐す人びとの自由な姿である。棺の安置されている廟の入り口は男女別に分かれており、内部にはもちろん、入り口付近にも男性の姿はない。そこでは、熱心にクルアーンを読む人や、食事をとって人、横になって目を閉じている人、レジャーシートを広げてあたかもピクニックに来たように小さな子供連れで談笑する人などがいた。ここでは祈りは強制されるものではなく、またよほど良識から逸脱した行為でなければ、常識的なルール（廟の中では靴を脱ぐなど）を別として参詣者の行動を制限する規則もない。

イスラーム哲学研究者である黒田壽郎は、イスラームにおける礼拝の自律性に関して、ムスリムが礼拝にあたって繰り返し唱える開扉章の文章を引用し、次のように述べている³。「この教えの特異な点は、一々の信者に対して監視、監督する人間、機関が何一つ存在しないことである。……礼拝とはこのように、唯一なる神の創造のプロジェクトにたいする、信者の自発的参加の意思表示に他ならないのである。」

また、特にスンニ派で用いられる主要なハディースの一つであるブハーリーの「真正集」には、預言者

² 嶋本隆光「Ⅱ-3 シーア派世界—イランの場合」(p. 141-156) 大塚和夫, 山内昌之編 (1993) 『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社

³ 黒田壽郎 (2016) 『増補新版 イスラームの構造 タウヒード・シャリーア・ウンマ』書肆心水社 (p. 139)

ムハンマドと彼に教えを乞いにやって来た男との対話形式で、^{アッラー}神(アッラー)が信者の自主性を尊重する旨をムハンマドが説く描写がある⁴。ムハンマドが「あなたは一昼夜に5回、正しく礼拝をおこなわなければいけません」と言い、男性が「その他(の礼)はありますか」と聞き返すと、ムハンマドは「いいえ。ただし、自発的な礼拝は別として」と答える。その後の会話には、礼拝の他に自主的な断食や巡礼を尊重する描写が続く。

また、そもそもイラン人の気質として「個人主義」的であることは岩崎葉子(2015)の述べるところである。岩崎は、「イランでは、システムはあるがそれは「集団」ではなく「個」単位としている。……したがって社会生活のあらゆる局面で自分の眼前にいる一人一人を動かさずには、ことが進まない」と指摘している⁵。また、この著者によれば、信仰も個人の問題として位置付けているため、たとえイラン最大の年中宗教行事であるアーシューラーの準備であっても、地域的・組織的な強制力などはないという。これは、日本人が周囲の目や、いわゆる世間体を気にし、また家族や村、会社などの組織の一員として「個」を消し、「個」の好むと好まざるとに関わらず、「集団」単位での行動を強いる環境と対照的である。

しかし、上述の例のみから信仰に関してイラン人だけが特別「個人主義」的であると断じることはできないことを指摘しておく。イスラームでは根本的に神と個人との関係を重視し、信仰の篤さは礼拝の多寡とは比較されない。日本ムスリム協会では、イスラームへの入信に関して、社会的にムスリムとして認知されるための手続きとして信仰告白の方法を紹介しながらも、「イスラームへの入信は本来アッラーと個人との関係ですので、特に人間による証明は必要としません」と述べている⁶。ここでも、重点が置かれているのは、「集団」としての行為ではなく、「個」と神との関係であることがわかる。

3. おわりに

イランで接した「祈り」について、自身の体験を交えながら、「自律性」「個人主義」という語を用いて説明を試みた。また、多くはない人数であるが、実際に信仰の体現であるムスリムの人びとと会話し、信仰や本報告書の主題である「祈り」の様相について知ることができたことを嬉しく思う。日本では西アジア社会やイスラーム世界について勉強し、ムスリムにとって信仰が「個」の問題であることや、イランの人びとが「個人」と「個人」との結びつきを重視するということが、授業や本を通して知っていた。しかしながら、実際にイランを訪れ、アザーンの音に目が覚め、ナマーズ・ハーネの多さに驚き、ムスリムに「祈り」について聞くという体験は、日本では決して得られないものであった。

最後に、本派遣を計画、引率して下さった笹川平和財団の水谷陣也さん、横山隆広さん、そして現地コーディネーターの穴田慶子さんに深謝の意を申し上げ、結びの言葉とさせていただきます。

(なお本所感は、執筆者個人の見解です)

⁴ ガーजीー・ビン・ムハンマド王子(2021)『現代人のためのイスラーム入門 クルアーンからその真髄を解き明かす二章』(小杉泰、池端路子訳)中央公論新社(p.38)用

⁵ 岩崎葉子(2015)『「個人主義」大国イラン 群れない社会の社交的なひとびと』平凡社(p.226)

⁶ 宗教法人法日本ムスリム協会、「イスラームQ&A」“Q:日本人でもムスリム(イスラーム教徒)になれますか?”、

<http://www.muslim.or.jp/%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%81%A8%E3%81%AF/#qanda>, (最終閲覧 2023, 3, 19)